見本

# 令　和　4　年　度

# 経　済　学　部

# 社　会　人　選　抜

# 小　　論　　文

## 注　意　事　項

1　試験開始の合図があるまで，この問題冊子を開かないこと。
2　この問題冊子は，全部で６ページ，解答用紙は２枚，下書き用紙は２枚である。
試験開始の合図があってから確認すること。
なお，試験問題に文字などの印刷不鮮明，ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れなどがあった場合は，手を挙げて監督者に知らせること。
3　試験開始後に，解答用紙の指定欄に受験番号を記入すること。
氏名を書いてはいけない。
4　解答は，指定された解答用紙に記入すること。
指定された解答用紙以外に記入した解答は，評価（採点）の対象としない。
5　配付された問題冊子および下書き用紙は，試験終了後，持ち帰ること。

実施年月日
3.11.24
富山大学

見本

【問題１】次の文章を読んで，［設問１］から［設問３］に答えなさい。解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

私たちの社会では、人々のあいだの規範は、ときどき破られたりすることはあるものの、明確に存在し、機能しています。これは一見するとごく当たり前のことのように思えますが、どのような条件で規範がうまく働くのか、そのロジックを改めて注意深く考えてみましょう。いささか複雑な議論ですが、お付き合いください。

規範がなぜ成立するのかについての一つの説明の仕方としては、「規範の存在が社会の存続にとって役に立っているから」という言い方があります。社会規範はヒトという種の存続にとって適応的だから存在する、と言い換えることも可能です。このタイプの説明は、社会学などで機能主義（functionalism）と呼ばれます。ごく単純化して言えば、社会の中にある制度や構造は当の社会の安定や存続にとって機能を果たしている、だから存在する、と考える議論です。しかし、①よく考えてみると、この議論には少し変なところがあると思いませんか？

革命や騒乱など激動の時代だった二〇世紀の初頭に、暴動や群衆行動などの集団現象を説明するため、「集合心」、「集団心」などの概念が提唱されたことがあります。人間の集合行動において、ふだんの個人の行動からはとても考えられない過激な社会現象が生まれることを説明するために、個人を超えた、マクロレベル（群集レベル）で働く「心」の存在が仮定されたわけです。人々は集合心に支配され、個人の独立性を失い盲目的に突き動かされている、といったイメージです。

このように、集団や社会のレベルのマクロな現象（規範もその一つです）を説明する際に、マクロな単位（集団、社会）をそのまま説明の単位に用いるのは、私たち自身、日常場面でよく行う説明の仕方です。たとえば、「学校がいじめを生み出した」「海外展開は組織の意思だ」などの表現を私たちはよく使います。社会科学においても、「グループは、自らのメカニズムに依拠して自己の構造を変化させる、自己組織的なシステムである」などの表現が見られます。

組織が意思をもつ、群集が心をもつといった言説は、マクロな社会現象（たとえば、集団ヒステリーなど）を記述するための喩えやレトリックには適しているかもしれません。しかし、それを「説明」するための科学的概念としては不十分だと考えざるを得ないようです。

その理由は、ハチやアリなどの社会性昆虫と違って、ヒトの集団や社会は、少なくとも個人と同じ程度には、それ自体のまとまりや持続的な意思をもち得ないからです（たとえば、学校は、行為者としてまとまった「一つの意思」をもち、いじめを生み出せるでしょうか？）。ヒトの集団や社会は、進化的に考えて、一枚岩の存在ではあり得ません。個人もたくさんの細胞から構成されていますが、集団や社会に比べればはるかに一枚岩のシステムです。社会心理学者オルポートは、この意味で、集団心や集合心などの概念を強く批判しました。オルポートは、集団心・集合心などの概念は、「集団を一つのまとまりや心をもつ実体と捉えた、誤った概念設定である」と批判し、そうした論理的誤りの

見本

ことを集団錯誤（group fallacy）と名付けています。

同じように、もし社会規範についての説明が、「ヒトの社会が、自らの存続に役に立つ社会規範を維持している」ことを少しでも意味するなら、それはヒト社会を主体・実体として見る集団錯誤の議論になります。個体が規範に従うかどうかの意思決定はできても、社会が「行為主体として自ら」規範を維持したり破棄したりすることはできないからです。人々が規範に従うかどうかは、社会が決めるのではなく、各人の意思決定の問題なのです。

では各人にどうやって規範を守らせたらよいのでしょうか。第一に社会教育によって規範を個人に浸透させること、そのうえで警察や法などの有効な制裁装置を作り出すことが考えられるでしょう。社会教育はもちろん重要で有効な方法ですが、掟（おきて）破りが生まれてくるのを完全に防ぐことはできません。とすると、どうしても社会的な制裁（sanction）装置を欠かすことはできません。

それでは、制裁装置をどうやって維持すればよいのでしょうか。たとえば、村の共有地に抜け駆けをして過剰放牧をした掟（おきて）破りに特別の罰を与える、先ほどのやり方を考えてみましょう。この制裁方法は一見するとうまくいきそうに思えます。しかし、ここでの問題は、抜け駆けをした者にわざわざ罰を与えるのには、自分にコストがかかる点です。たとえば、個人で罰を与えようと試み、掟（おきて）破りに返り討ちされる可能性を考えてみてください。ならば抜け駆けをした者に怒りは覚えても、自分は罰を与える労をとらず、誰か他の人が罰を与えるのを待つことにならないでしょうか。②掟（おきて）破りに罰を与えるか、与えない（見て見ぬふりをする）かの選択についても、共有地にたくさん放牧するか、控え目にするかというそもそもの選択と、構造的にまったく同じ社会的ジレンマ(注)が存在することになります。

一方、自警団や警察に取り締まってもらえばよいとする議論に対しては、それを維持するコストを払うか、払わないかをめぐる同型のジレンマが存在します。さらに「見て見ぬふりをする村人を個人的に罰する」というもう一段上の解決策も考えられますが、罰を与えることにはやはり同じようにコストがかかります。

こう考えると、どこまでさかのぼってもジレンマから簡単に抜け出せないことは明らかです。こうした無限にさかのぼる「高次のジレンマ問題」を世界で最初に実験で取り上げたのは、北海道大学の山岸俊男教授でした。この根本的な問題は、モノやサービスに対してコストを支払わずその利益だけを享受する、ただ乗り問題（free-rider problem）と呼ばれ、社会的なシステムをどのように設計するかを考えるうえで重要な鍵を握ります。

結局、特別の罰を与える方法があっても、経済的合理性の観点から誰もそのコストを引き受けようとしないなら、事実上、「社会的に罰は存在しない」ことと同じになります。もし、人間が個人利益の最大化を図ることを前提にするのであれば、「誰も罰しない」ことを冷徹に読み切った村のずる賢い掟（おきて）破りは、

見本

堂々と掟（おきて）を破り、ただ乗りを続けるはずです。しかし、③実際の私たちの社会では、制裁は機能し、規範は維持されているように思えます。いったい、これはなぜなのでしょうか。

注：社会的ジレンマとは個人の利益と社会全体の利益が一致しないことを意味する。たとえば，村の掟（おきて）破りに罰を与える行為には，社会的には村の規範が維持されるという利益がある一方，個人的には返り討ちにされるかもしれないという不利益がある，という社会的ジレンマが存在する。

出典：亀田達也『モラルの起源―実験社会科学からの問い』（岩波新書，2017年）61-66頁（問題作成において，文章・見出し・図を一部省略・修正・加筆した）

［設問１］ 下線部①に関して，規範の成立に関する機能主義の議論がなぜ変なのか，文中の語句を用いて70字以内で説明しなさい。

［設問２］ 下線部②に関して，「共有地にたくさん放牧するか，控え目にするかというそもそもの選択」について文中では明確には説明されていないが，この選択における社会的ジレンマがどのようなものか，注および問題文の内容を参考に類推し、述べなさい（90字以内）。

［設問３］ 下線部③に関して，現在，新型コロナウイルスの感染が深刻化する中，私たちは外食の自粛や外出時のマスクの着用を求められている。このような状況におけるただ乗り問題を説明した上で，これらの「規範」が一定程度守られているのはなぜか，問題文の内容を参考にあなたの考えを300字以内で述べなさい。

見本

【問題２】次の文章を読んで、［設問１］から［設問４］に答えなさい。解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

中新川郡にある舟橋村は、富山平野のほぼまんなかに位置する、人口 3000 人あまりの村である。面積はわずか 3.47 ㎢。全国に 1700 以上ある地方自治体のなかで、もっとも「小さな村」として知られている。

（中略）

舟橋村のおもしろさは、「日本一小さな村」であるだけでなく、「①奇跡の村」としても知られている点にある（富山新聞社報道局編『奇跡の村・舟橋』）。

では、なぜ「奇跡の村」とまでほめたたえられるのか。

それは、面積が日本一小さいだけではなく、ふつう、僕らが小さな村では予想できないような、活気のある行政、人口の流入が起きているからである。

人口 3000 人と聞くと、都会に住む人は、その数の少なさにおどろくかもしれない。

だが、舟橋村では、バブル崩壊前の人口は 1400 人前後と低空飛行をつづけていたのに、これが 1990 年代の半ば以降に急増して、その倍以上の数にまで増えたのだ。

人口急増、それは村が「市街化調整区域」から外れたことが大きな理由だった。市街化調整区域とは、無秩序な開発を抑制するためのもので、あらたな建築物を建てることが原則禁止される地域をさしている。1970 年度に舟橋村はこの区域に指定されてしまい、土地開発ができなくなり、人口の増加に歯止めがかけられてしまったのである。

松田村長は、ときには自費を交通費にあててまで、粘り強く、国や県と交渉・陳情を積み重ねた。そして 1988 年、とうとう８年越しの苦労が実り、全国初の区域からの「除外」が実現することとなった。

こうして、舟橋村は「ベッドタウン」として生き延びていくという決断を下し、一気に土地の再開発が動きだした。すると、安価な土地を理由に、富山市に通勤する人たちが、大勢、舟橋村にやってきたのだった。

（中略）

舟橋村を一躍有名にしたのは、駅に図書館を併設させ、村民１人あたりの図書貸出冊数が日本一を記録したというできごとではないだろうか。

（中略）

舟橋村立図書館の特徴は、先ほどふれたように、施設が駅舎と併設されている点にある。

村がまず取り組んだのは駐車場の場所の確保だった。理由は、老朽化の進んだ駅舎の建てかえにあわせて、「パーク＆ライド方式」を採用したためである。

「パーク＆ライド方式」とは、郊外の駐車場に車をおき、そこから公共交通機関を使って市街地に移動する方法のことだ。ようするに、駅の駐車場に車を停め、富山に通勤するという方法をめざしたわけだ。

見本

（中略）

ベッドタウンをめざす以上は、電車の停車本数は決定的に重要な意味をもつ。だったら近隣の人たち、村外の人たちを呼び込もうじゃないか――こうして、「パーク＆ライド方式」が採用され、駐車場の整備が進められた。

この駐車場は当初無料で村外居住者にも開放された。越中舟橋駅を利用する人たちの居住範囲が一気に広がり、駅の利用者の数が増えたことはいうまでもない。

役場の努力に富山地方鉄道も応じた。予定されていた越中舟橋駅の無人化を取りやめ、急行停車駅に変更、さらには、8 時台に停車する本数を 3 本から 7 本に増やしたのだ。

（中略）

駅の改修、図書館の開設、駐車場の整備、これらの事業には 10 億円を超える予算がかかった。国からの補助金を差し引いても舟橋村の自己負担は 9 億円を超えていた。

この事業は 1996 年度から 2 年度にわたって実施されたものだ。ちなみに、97 年度の村の予算が 22 億円であるから、相当な規模の公共投資が実施されたといえるだろう。

②村はじつに大きな決断をしたことになる。「ムダ」のレッテルが貼られがちな公共投資ではあるが、とても大きな投資効果――それも、経済効果だけではなく、絶大な社会的効果――があったことをここでは認めざるをえない。

（中略）

ところで、一見すると順風満帆に見える舟橋村であるが、いまの村長である金森勝雄さんを悩ませている大きな問題がある。

以前から住んでいる「旧住民」、新しく移住してきた「新住民」、なかでも高齢化が進んだ「新住民」、さらに新しく引っ越してきた子育て世代の「新・新住民」とのあいだで、③コミュニケーションを取ることがむつかしくなりつつあることだ。

「新住民」は、新興住宅地や団地に住む人が多い。地理的に分断され、「旧住民」との交流が活発だとはいえない状況が続いた。しかも、政治的には、どうしても「旧住民」の声が大きくなるから、自分たちの要望に耳を傾けてもらえないことに「新住民」は不満をおぼえがちだ。

ひとつの例をあげよう。

舟橋村の議員報酬は県内でもっとも安い月額 15 万円程度だといわれている。自分でローンを組み、土地や家を買った人たちは、とてもではないが村議になって、自分たちの声を議会にとどけることはできない。

それだけではない。さらに「旧住民」の高齢化が進むことで、立候補者の数が減る。そうなると政治への関心が村全体として停滞するという構造的な問題も起きてしまう。

「新住民」と「新・新住民」の距離感も目につく。

「新住民」のうち、若い世代の「新・新住民」は、地域のお年寄り＝「新住民」とあいさつ程度しか交流はない。

これに対して、「新・新住民」のなかでは、子育てや小学校のかかわりで助

見本

けあいの関係が生まれる。だが、子どもが学校を卒業してしまうと、そうした助けあいはすっかり希薄になる。これを放置すれば、また彼らが歳を取ったとき、地域に根を張れない人が大勢あらわれることは、簡単に予想がつく。

（中略）

「新・新住民」にあたる子育て世代をどのように地域社会のなかに受け入れ、定着させていくか。この問題は、少子化を食い止めるうえでも、ベッドタウン機能を活性化させるうえでも、④長期的に見て、非常に重要な課題となる。

出典：井手英策『富山は日本のスウェーデン　変革する保守王国の謎を解く』集英社新書、2018年、154～164頁（問題作成において、文章・見出し・図を一部省略・修正・加筆した）。

［設問１］下線部①について，ここでの「奇跡」とは具体的にどのようなことか。本文中の言葉を用いて説明しなさい。

［設問２］下線部②について，舟橋村の「大きな決断」はどのような効果をもたらしたか。本文中の言葉を用いて具体的に説明しなさい。

［設問３］下線部③について，「旧住民」，「新住民」，「新・新住民」とのあいだでコミュニケーションを取ることがむつかしくなる原因は何か。本文中の言葉を用いて説明しなさい。

［設問４］下線部④について，「長期的に見て、非常に重要な課題」に対し，村としてどのような解決策を講じるべきであると考えられるか。あなたの考えを具体的に述べなさい。